

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21792166

研究課題名（和文） 看護職者の患者指導スキルの実態調査及びスキル向上に向けた
定量的評価ツールの開発研究課題名（英文） The survey of nurses' patient instruction skill and development
of a quantitative evaluation tool for the improvement in instruction skill

研究代表者

會津 桂子 (AIZU KEIKO)

弘前大学・大学院保健学研究科・助手

研究者番号：90436014

研究成果の概要（和文）：

本研究は、看護師の患者指導スキルの実態把握および、指導スキルに関する定量的評価ツール作成のための基礎資料を得ることを目的とした。看護師の指導スキルを現職小学校教員の指導スキルとの比較において分析した結果、看護師の指導では「説明」の割合が高いこと、説得効果を高めるとされる「身近な話題」「激励」が多いこと等がうかがえた。また、新規に作成した評価表を用いて4名の看護師の指導場面を評価し、評価表の信頼性を検討した結果、看護師1名を除き α 係数0.91～0.94の高い信頼性が得られた。評価項目間の相関より、患者の思考を促す発問を多く取り入れたり、患者の発言を受容して指導に活かしたりすることで、患者の主體的な参加状況が高まり、教育効果が高まることが示唆された。

以上より、看護師の指導スキルの特徴および説得効果を高める指導スキルの特徴が把握できたとともに、指導スキル向上のために活用出来る新規の評価ツール作成のための基礎資料が得られた。

研究成果の概要（英文）：

The purposes of this research were to analyze the feature of a nurse's patient instruction skill and to obtain the underlying data which could be used to create a quantitative evaluation tool for instruction skill.

Analysis of nurse's patient instruction skill was done by comparing it to an incumbent primary teacher's instruction skill. The result suggested that the rate of "explanation", "the familiar subject" and "encouragement", etc. in nurse's instruction are high. Moreover, I examined the reliability of the newly checklist by evaluating 4 nurses' instruction skills using the checklist. As a result, except for one nurse, α coefficients are 0.91-0.94 and it was thought that the reliability of the checklist was high.

As mentioned above, the features of a nurse's patient instruction skill was suggested and the result obtained underlying data which could be used to create a quantitative evaluation tool for instruction skill.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護教育学

1. 研究開始当初の背景

疾病構造の変化や保健医療システムの変革に伴い、慢性疾患患者や在宅療養者が増加し、保健医療従事者による健康教育や疾病予防への対応が強く望まれている。看護職者には、患者への健康教育の需要の増大に伴い、教育力の向上が求められている。

しかし、看護職者の教育・指導技術の自己評価においては、やりがいや面白さを感じず、臨床経験を3年経ても「できる」という評価には至っていないとの報告もある。その理由として、指導スキル向上の為のアプローチ方法が明確ではないこと、指導スキルのレベルに関する明確な評価基準が無いことが挙げられる。患者教育に関する先行研究においては、教育手段の工夫や効果、教育内容などの解明を試みているものがあり、より効果的な患者教育の実現が模索されていることがうかがえる。しかし、看護師の指導スキルについて定量的に評価した研究は見当たらず、看護職者における指導スキルの実態も明らかとは言えない。

本研究では、患者の行動変容を促す効果的な患者教育実現のための手段である指導スキルに着目する。教育学領域においては、「教授スキル」とは「教授意図を達成するのに効果的であると判断されるような教授行動のパターン」と定義され、「言語行動」と「非言語行動」が含まれる。また、教育現場において教師が生徒の態度や行動を望ましい方向に導いていくための行動を「説得行動」と言う。教師は、多様な言語的・非言語的指導スキルを活用して生徒の自発性を引き出したり、説得効果を高めて行動変容を促進したりしている。

2. 研究の目的

(1) 看護師の患者指導スキルの実態を、看護教育に従事する高等学校看護教諭の指導スキルとの比較において明らかにする。

(2) 看護師の患者指導スキルを、教育学分野における教授スキル分析の視点を取り入れ定量的に分析し、指導スキルの新規の定量的評価ツール開発への基礎的資料とする。

3. 研究の方法

(1) 対象者

模擬患者指導実施者：日常業務において集団

患者指導を実施している看護師4名

模擬患者：H大学看護学専攻学生6~9名

授業実施者：A県内小学校に勤務する教諭5名

授業対象者：A県内小学校に在籍する児童

模擬指導場面評価者：看護学教育に従事する
大学教員12名

(2) 模擬患者指導の実施

日常業務で実施している患者指導と同様の指導を再現した。1回の指導時間は約30分間とし、VTR撮影をした。

(3) 授業場面の撮影

当該小学校で実施する研究授業へ参加し、実際の授業場面をVTR撮影した。1回の授業時間は約45分間であった。

(4) 分析

① 行動コーディングシステムによる解析

行動コーディングシステムとは、行動解析を目的とした解析ソフトであり、パソコン上で映像を視聴しながら、カテゴリー化した行動が出現した際に対応するキーを押すことで、行動の生起・持続時間を記録し、出現頻度や出現率等の産出を行うことが可能である。

解析は、視線、表情、姿勢、例示動作、あいづち、うなずき、教材提示行動の各項目の出現時間・出現率・回数を算出した。

② 新規に作成したチェックリストを用いた評価

教育学・心理学分野の先行研究を参考に、言語行動に関する評価28項目、非言語行動に関する評価10項目から構成されるチェックリストを作成した。評価は看護学教育に従事する12名の教員が個別に、模擬患者指導場面のVTRを視聴して実施した。「当てはまる」から「あてはまらない」の5段階で評価するよう求めた。

(5) 統計解析

統計にはPASW Statistics18を用い、看護師・教員の比較にはMann-Whitney Test、相関分析にはSpearman's rank correlation coefficientを用いた。有意水準は $p < 0.05$ とした。

(6) 倫理的配慮

指導実施者および模擬患者へは、研究目的、研究への参加の有無及び結果は、勤務や学業成績とは無関係であることを文書および口頭で説明、同意を得られた者を対象とした。

4. 研究成果

(1) 看護師の指導スキル (言語行動)

看護師の模擬患者指導場面における出現率では、「説明」が最も多く、平均で 62.3% であった。「説明」の中では「知識・題材についての説明」が最も多く、31.0% であった。説得効果を高めるとされる「身近な話題」は 14.8%、対象者の思考を促し、自発性を高めるとされる「発問」の返金出現率は 4.05%、平均出現回数では 14 回であった。

(2) 看護師の指導スキル (非言語行動)

看護師の模擬患者指導場面における「視線」の出現率では、「正面」が最も多く 37.1%、次いで「後方」で 24.4% であった。「表情」では「真顔」が最も多く 55.5% であった。例示動作の出現率は 8.2%、教材提示行動は 29.2% であった。

(3) 教員の指導スキル (言語行動)

教員の授業場面においては、「説明」の平均出現率が最も多く 20.2% であった。「説明」の中では「知識・題材についての説明」が最も多く 10.7%、次いで「手順」で 6.2% であった。説得効果を高めるとされる「身近な話題」0.5% と少なかった。対象者の思考を促し、自発性を高めるとされる「発問」は、平均出現率では 5.5% であったが、平均出現回数では 43 回であった。対象者の発言では、指名応答 2.5%、非指名応答 16.3%、自発発言 8.8%、感嘆・つぶやき 1.2% であった。教員の指導では、看護師に見られなかった「机間巡視中の発言」が認められた。

(4) 看護師および教員の指導スキルの比較

看護師・教員共に「説明」の平均出現率が最も多かったが、看護師では 62.33% と 4 教員の 20.16% に比べて特に多く見られた。「説明」の中では「知識・題材についての説明」が看護師・教員ともに最も多かったが、看護師では次いで「身近な話題」が 14.80% と多かったのに対し、教員では次いで「手順に関する説明」が多く、「身近な話題」は 0.54% と有意 ($p < 0.05$) に少なかった。また、「指導」は看護師が有意に多く ($p < 0.05$) 「指示」「繰り返し」は教員が多かった ($p < 0.05$)。対象者の発言では、非指名応答、自発発言、感嘆・つぶやきの 3 項目において、教員が看護師に比べ有意に多かった ($p < 0.05$)。

全指導時間内に各カテゴリーの内容が出

現した回数を、30 分間に換算して比較したところ、「発問」は教員が 43 回、看護師 14 回と、教員の方が有意に多かった ($p < 0.05$)。

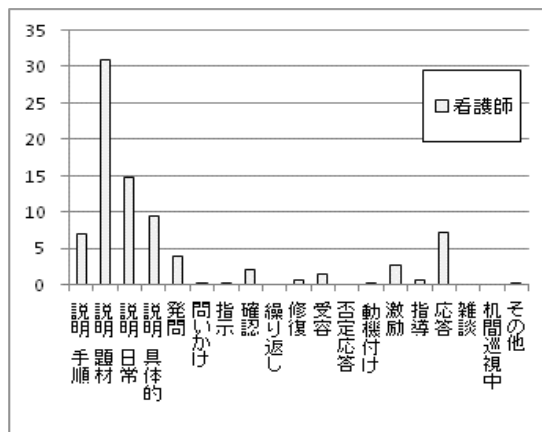


図 1 看護師における各カテゴリーの出現率 (%)

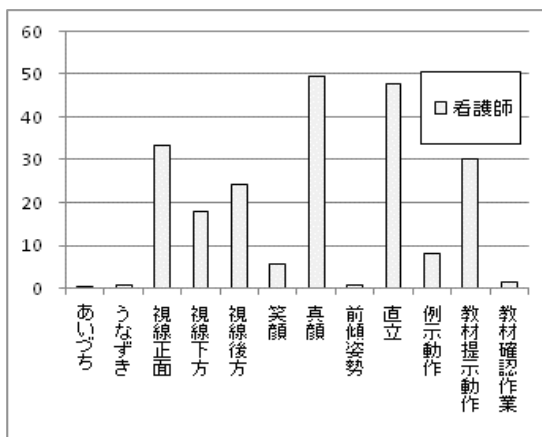


図 2 看護師における各カテゴリーの出現回数 (回)

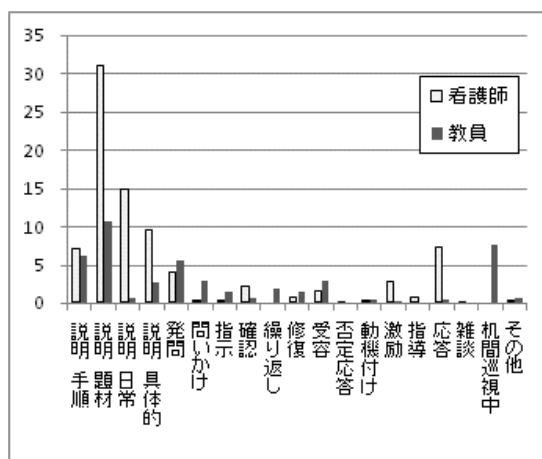


図 4 看護師および教員における各カテゴリーの出現率 (%)

(5) 新規に作成したチェックリストの信頼性

教育学・心理学分野の専攻研究を参考に作成した、言語行動に関する評価 28 項目、非

言語行動に関する評価 10 項目から構成されるチェックリストを用いて、看護師による模擬患者指導場面を評価した。評価は、看護学教育に従事する 12 名の教員が個別に行った。

チェックリスト評価項目の信頼性は、クロンバック α 係数を用いて評価した。看護師 1 名を除き $\alpha = 0.91 \sim 0.94$ となり高い信頼性が得られた。看護師 1 名については 9 項目を除外することで α 係数の上昇が認められた。9 項目に関しては、内容を精査しより信頼性の高いリストの作成が課題となった。

(6) 説得効果を高める指導スキル

チェックリストによる評価結果と、行動コーディングシステムを用いた解析結果の相関を分析した。以後、評価結果を「」、行動解析の結果を《》で示す。

非言語行動では、「話し方に説得力がある」「患者が話しやすい雰囲気」「受容的態度」の 3 項目と《視線・正面》の間に強い正の相関が認められた ($p < 0.000$)。チェックリストの項目間では、「患者の顔を見て話す」と「話し方に説得力がある」「患者が話しやすい雰囲気」「受容的態度」の 3 項目、「笑顔」と「身振り手振りを用いた」の間など複数項目で強い正の相関が認められた ($p < 0.000$)。

言語行動では、「内容に説得力があった」と《激励・励まし》の間、「患者の理解度を確認した」と《受容》、「推奨事項の説明」と《身近な話題》等複数項目間で強い正の相関が認められた ($p < 0.000$)。また、チェックリストの項目間では「患者の主體的参加を促していた」と「思考を促す発問が多かった」「全体への発問が多かった」「患者の発言内容や気持ちを受容していた」「患者の発言内容を指導に活かしていた」「患者が主體的に参加していた」との間に強い正の相関が認められた。

以上より、指導においては患者の思考を促す発問を多く取り入れ、患者の発言に対しては受容的に応答して発言内容をさらに深める形で指導に活かすなどの工夫が、患者の主體的参加を促し、説得効果を高めることにつながることを示唆された。また、複数の異なる要因間にも相関が認められ、指導スキルは個々のスキルが独立して身に付くものではなく、交互に関連して向上していくと考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 3 件)

(1) 會津桂子、安杖優子、西沢義子、工藤せい子

、小林朱実、垣内悦子、鎌田恵里子、看護師の患者指導スキルの特徴に関する教育学的分析 第 1 報：現職教員との比較—言語的スキル—、第 31 回日本看護科学学会学術集会、2011 年 12 月 2-3 日、高知市

(2) 會津桂子、安杖優子、西沢義子、工藤せい子、小林朱実、集団患者指導において説得効果を高める非言語的要因の解析—模擬患者指導の事例分析から—、第 30 回日本看護科学学会学術集会、2010 年 12 月 3-4 日、札幌市、他
[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

會津 桂子 (AIZU KEIKO)

弘前大学・大学院保健学研究科・助手

研究者番号：90436014

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：